

生徒指導力高度化コースにおける2年間の学びの振り返り

藤木 愛加

(生徒指導力高度化コース第7期生)

1. 生徒指導力高度化コースを選んだ理由

私は学部生の時、小学校でのボランティアや学校インターンシップ、教育実習を通して様々な子どもたちと出会ってきた。その中で、不登校傾向にあったり、発達障がいからクラスに馴染めなかったりと、困り感を抱える子どもたちとも関わってきた。そのような子どもたちと向き合うためにはどうすればよいか、教師として何ができるかを考えたいと思い、生徒指導力高度化コースを選んだ。

2. 大学院での学び～M1前期～

M1の前期には、各講義で「いじめを防止するためには?」「発達障がいの子どもの支援するためには?」「望ましい集団を作るためには?」などの課題について考えた。それらの学びを通して、個々の子どもたちが何に悩み、何を求めているか、その困り感を知る必要性があることに気付かされた。また、選択科目の「現代社会と子どもの育ち」では現代に生きる子どもたちの心にフォーカスを当て、議論し合った。「“キャラ”を装うのはなぜか」「校則を破るのはなぜか」「ファンタジーにのめり込むのはなぜか」といった問いを受講者全員で考えていく中で、子どもたちを取り巻く環境についての認識を改めさせられ、子どもたちの心理をより深く追究することができたように思う。

3. 教職専門実習Ⅰでの学び

教職専門実習Ⅰでは、自身の課題も多く見つかる中で、学部生の頃同様、困り感を抱える子どもたちと関わることになった。それは、友だちにきつい言葉を言ってしまう、喧嘩をした時に言葉で上手く自分の気持ちを伝えられないといった社会的なスキルの未熟さからくる困り感だった。私はこの経験から、社会的スキル向上のための方法について勉強したいと考えるようになった。

4. 大学院での学び～M1後期～

M1後期では、教職専門実習Ⅰで感じた「社会的スキルにおける子どもたちの困り感」について課題意識を持ちながら学習を進めた。そんな折、後期に受講した生徒指導実践演習でソーシャルスキルトレーニングの方法とその理論について学ぶ機会を得た。私は、子どもたちの困り感解消のためには、社会的スキル向上のためのトレーニングであるソーシャルスキルトレーニングが有効なのではないかと思い、講義で学んだことをもとにして、ソーシャルスキルトレーニングについて自主的に調べたり、授業案を考えたりした。

5. 教職専門実習Ⅱでの実践

教職専門実習Ⅱでは、担任の先生のご厚意で、道德の時間を使ってソーシャルスキルトレーニングの実践をさせて頂いた。伸ばしたい社会的スキルは、「友だちを大切にしてほしい」という担任の先生の願いや、子どもたちが決めた「困っている人がいたら助ける」という学級目標を汲んで、「助け合い」に決めた。また、授業内で行ったことを日常生活にも結び付けるために「友情の木」を子どもたちに提案した。「友情の木」とは、友だちに助けてもらったこと、助けてもらって嬉しかったことを花形の紙に書いて枯れ木に貼っていくことで、助け合い・思いやりの心を育てようとする取り組みのことである。また、「ありがとうチャンスチャレンジ週間」も設置し、子どもたちが積極的に「助け合い」ができるようにした。

6. 修了論文について

修了論文は、教職専門実習Ⅱの実践を中心にまとめた。実践前後の質問紙調査の結果と観察調査の結果から考察している。使用した質問紙は河村（2000）の「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度」で、実践前後の4月と7月の得点平均をt検定で分析した。その結果、スキル全体と「配慮のスキル」、「かかわりのスキル」の2因子には有意な差は見られなかったが、項目別に見ると、「自分でしてもらいたいことを、友だちにしておいている」と「何かをたのんだりするとき、相手にめいわくがかからないか考えている」に有意な差が見られた。観察調査の結果は以下の通りである。実践を始める前の4月当初は、口では「友だちは大切にしやなあかん」、「助け合うのは当たり前」と言っているが、実際に実行できる子どもは少なく、自分のことで精一杯である様子が伺えた。しかし、1学期の中盤あたりから、友だちのことを思いやり、助け合おうとする姿勢が垣間見られるようになった。例えば、保健室に行ってしまった友だちに代わり給食の当番を自ら買って出たり、係りの仕事を一人でやっている友だちがいれば、自分がその係りでなくても手伝いをしたりしていた。それ以外にも、友だちが怪我をした時、大切な髪飾りをなくして落ち込んでいる時に子どもたちは励ましの言葉をかけていた。

質問紙調査、観察調査の結果から、子どもたちの社会的スキルの向上に一定の効果があると示された。それは、子どもたちに日々の行いについて深く考えさせたり、振り返らせたりする道德の授業とソーシャルスキルトレーニングを結び付けたことや、発達段階に応じた学級での取り組みを工夫したことが要因として挙げられるのではないかと考える。

7. 2年間の学びを振り返って

教職専門実習Ⅱの実践からも分かるように、教職大学院での2年間で理論と実践を融合させた深い学びができた。これは、大学院で「考える」という時間を持てたからこそできたことであると思う。現場に出れば即座に判断し、行動していかなければならないと思うが、子どもとの接し方や授業、または「教育」という大きなテーマについて、考え続けられる教師になりたいと思う。